

なるほど! ルーツ調査隊

ロードサイドや銭湯などでガラス張りの明るい店舗が目立つコインランドリー。全国に2万店以上あり、単身者だけでなく共働き家族などの強い味方だ。だが今の姿に発展するまで何段階かのステップがあった。1980年前後に東京都内の銭湯で一気に増えたことが全国普及のきっかけだ。

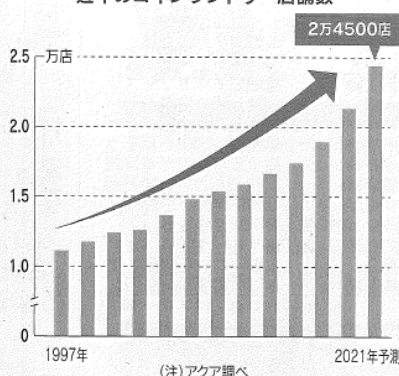
「銭湯の男湯と女湯に1台ずつコイン式洗濯機をおき、売り上げは私たち家電商と銭湯で折半。それが始まりの姿だった。東京都内を中心にベニ軒のコインランドリー開設を支援してきた東和コシンステム(東京・葛飾)会長の鈴木正名さん(88)は、懐かしそうに話した。

5年で4倍超に
1980年創業の鈴木さんの店は、早くからコイン式洗濯機を生産していた三洋電機(洗濯機部門は現アクアが承継)の協力店だった。家電製品を幅広く取り扱う店舗チェーンを目指し3~4店出店したが人材難でうまくいかない。悩ましい時期が続いたが、72年に「足立区の店舗前に置いたコイン機3台が予想に使われた」ことに気づいた。このヒントに加え、東京

コインランドリー 銭湯生まれ?

60年代、憧れのライフスタイル

近年のコインランドリー店舗数



東京都世田谷区の通り沿いにもガラス張りの店舗がでている(マンマチャオ池尻淡島通り店)

の公衆浴場団体のトップが知り合っていたことが「銭湯にコイン機を置いてもらう」発想に結びついた。70年代後半、鈴木さんと同業の家電販売店経営者6人がグループをつくり、銭湯に的を絞ってコイン機設置を働きかけ始めた。「毎週のように集まって戦略を練り、東京中の銭湯を二軒一軒回った」という。

後に設立された全国コインランドリー連合会が91年に発行した「コインランドリーの歴史」によると、75年当時の店舗数は全国で約1500。これが80年に6500に急伸した。4000店が関東に集中し、その多くが銭湯併設型だった。70~80年代初頭、銭湯併設型コイン機は、当時はやっただけの「神田」が描き出した、風呂なしアパートから銭湯に通う学生、勤労層の需要にぴたりと合った。しかし、服衣場の広さには限りがあり、やがてコイン機は銭湯前や脇の専用スペースに移り始める。「コインランドリー」の本格的な誕生である。

銭湯「風呂なしアパート」という日本の情緒の中で、大衆化したランドリーだが、



国内初のコインランドリーは赤羽台団地(東京都北区)に設けられた「都市再生機構提供

正確な記録が残る国内コインランドリー第一号の稼働日は63年5月3日。場所は日本住宅公団(現・都市再生機構)が造成した赤羽台団地(東京・北)内だった。同機構が保存する当時の文書は誇りに書く。アメリカ製のすぐれた機能を持つドラフトリーニング機械、遠心分離式脱水機、乾燥機等をわが国で初めて導入したものだ。そのうえで「洗濯物をこのセンターに持ち込み、団地内商店で買い物をしたり、あるいはその場で細み物などをしている間に立派に乾燥して出来上がるという仕組みになっている」。そこには米国的な明るくスタイルへの憧れがあった。次いで64年、今では歴史あるヒンディーモンションとして知られる東京・神宮前のコーポレーションにランドリーが作られた。戦後の住宅事情の悪さを引きずっていた当時、団地やマン

ションに住む都会的な生活は羨望の的。極めて実用的な施設であるコインランドリーも、最先端の生活の一部だった。

64年公開の東宝映画「団地七つの大罪」にはそんな高揚感と変化への戸惑いがコミカルに描かれている。映画では、外国が、おれたちが、団地に設置された自動洗濯機(ランドリー)での洗濯を夫に押しつけ、家父長制の権威を形無しにする様子も描いた。

4番目の興隆期

清掃業務を兼ね20年かけて都内の施設約3900カ所を回った「コインランドリー刑」こと藤原健一さんは、現在のコインランドリーは草創期、銭湯併設期などを経た4番目の興隆の段階にあると分析する。

第3段階は2000年ごろ始まる。特徴はチェーン展開によるロードサイドの明るいガラス張り店舗の誕生だ。「雰囲気がかジュアルになり、働く女性や主婦に広く受け入れられた」と説明する。洗濯中の時間を過ごすためカフェ併設型も一時は増えたが、この手法は大きくは成功していないとみる。

藤原さんは、気候変動による長雨が頻発するようになった16年以降を第4段階とする。「布団などの大物や、雨で干せない大量の洗濯物を一気に洗濯・乾燥できる大型機が人気化した。金融機関も出店の融資に積極的で店舗数が増えた」。そして今、コインランドリーは利用者の性別・年代を問わず頼りにされ、各地に溶け込んだ存在となっている。(鎌哲司)